

中世の霞ヶ浦に生きた海の民

——海夫——

第十七回世界湖沼会議（いばらき霞ヶ浦2018）が十月十五日（十九日にかけて、「人と湖沼の共生—持続可能な生態系サービスを目指して」）をテーマにつくば国際会議場などで開催されます。

中世の霞ヶ浦では、鬼怒川や小貝川などから運ばれる土砂が霞ヶ浦の出入口に堆積したことから、今まで、入り込んでいた海水が妨げられるようになります。すると、淡水が混じりはじめ、霞ヶ浦は、海から汽水湖となりました。それが分かる遺跡が生涯學習センター（コスマス）の近くに所在しています。高崎城内に形成された「岡の内貝塚」で、常滑焼などの土器とともに汽水域で生息するヤマトシジミの貝殻が残されていました。つまり、当時の人々は汽水湖となつた霞ヶ浦でヤマトシジミをとつて、食べ、貝殻を捨てていたのです。

中世の霞ヶ浦では、鬼怒川や小貝川などから運ばれる土砂が霞ヶ浦の出入口に堆積したことから、今まで、入り込んでいた海水が妨げられるようになります。すると、淡水が混じりはじめ、霞ヶ浦は、海から汽水湖となりました。それが分かる遺跡が生涯學習センター（コスマス）の近くに所在しています。高崎城内に形成された「岡の内貝塚」で、常滑焼などの土器とともに汽水域で生息するヤマトシジミの貝殻が残されていました。つまり、当時の人々は汽水湖となつた霞ヶ浦でヤマトシジミをとつて、食べ、貝殻を捨てていたのです。

農半漁を生業としていた「海夫」と呼ばれる人々が住んでいました。彼らは、漁業だけではなく、船を操り、年貢や物資の輸送にも関わっていたとされています。

十二世紀中葉以降、常陸、下総両国の海夫は、香取神宮の支配下にあつて神祭物を献上することで、霞ヶ浦での自由な活動が保証されていました。しかし、南北朝の混乱期には在地領主の影響力が大きくなりました。このため、応安七年（一三七四）、室町幕府は、海夫が新たに香取神宮の支配に入るよう命じました。この際に、作成された『海夫注文』には、海夫の拠点となつた「津」とそこを支配する地頭の名が記されています。その中には「大糸たの津 大せう知行分」とあります。『大枝の津 大猿知行分』と読みます。大枝は、現在の小美玉市大井戸地区のことです。



『海夫注文』に見える津の分布図



岡の内貝塚近景



岡の内貝塚出土のヤマトシジミと土器

親子移動教室を実施しました

毎年恒例の親子移動教室を8月20日（月）に実施しました。

今年度は、栃木県小山市の森永製菓（株）と埼玉県羽生市のさいたま水族館を訪れ、16組の親子等が参加しました。

森永製菓（株）小山工場では、菓子作りの工程説明を受けながら見学をし、さいたま水族館では、飼育専門員からカメについての話を聞き、水辺の生物に直接ふれながら、その特徴や生態などを楽しみながら学ぶことができました。

仲良くふれあう姿があちこちで見られ、親子の絆が深まった一日となりました。